

プロジェクト報告◆科学館プロジェクト④

科学館訪問記「アクアマリンふくしま」

プロジェクトメンバー 堀井雅恵

科学館プロジェクトでは科学館の現状を調べながら、私たちが求める新しい概念の科学館を模索し、計画の提案・実現を目指しています。現在、メンバーが個々で科学館めぐりをして情報を集める活動もしています。

今回は、私が見学した福島県小名浜の「アクアマリンふくしま」の主な展示の紹介と私の感想を述べます。アクアマリンふくしまは JR 常磐線泉駅からバスで約 15 分の海辺にある、出来て間もない新しい水族館です。

導入部・海・生命の進化

入り口を入ると暗い通路がのびていて、壁に生命の起源の映像が……ここはほんとに水族館?まるで、自然史博物館の地質・生命系展示の雰囲気です。さらに進むと化石が展示してあり、ますますその感が強くなりますが、ふとその先を見ると水槽があって中に生き物が……。

実は「生きた化石」とその近縁種の化石が同じ空間に展示してあるというわけでした。カプトガニ、オキナエビス貝、肺魚やシーラカンス。特にシーラカンスの化石は、一般の自然史博物館の化石展示と比べても遜色のないものです。残念ながら生きたシーラカンスは映像でした。アクアマリンふくしまはシーラカンスをメインテーマのひとつにしているのですが、福島でなぜシーラカンスなのかは、わかりません。

生態系展示・ふくしまの川と沿岸、熱帯アジアの水辺

一番心に感じる場所があったのは、水槽だけでなく、周辺の植生環境も再現した展示。さながら植物園です。断面を見せた水槽は小さくても、背後の植生の規模が大きく、見えない部分まで草木が植えてあり、生態系に奥行きを感じます。本物の自然とは比べようがないけれども、時間に追われる現代人が短時間で川の上流から下流までの変化を楽しむことが出来ます。この生態系の展示は、福島川の自然を再現したものと熱帯アジアの水辺を再現したものと2カ所あります。それぞれ、上流から下流までの連続したピオートープがあるという感覚です。

ガラスの屋根付きなので鳥が生態系に参加していないのではないかと思ったのですが、鳥用の出入り口があるそうです。もちろん、ぶつかってしまう鳥もいるとは思いますが……。大きな陸上動物は無理ですが、トカゲ等は放してあるそうです。もちろん虫もいます。個人的には「ふくしま」の展示の方がコンセプトとして好きで

す。熱帯アジアの方は黒潮の源流という位置づけで、マングローブの生態系の再現など面白いのですが、外界から入ってくるのは福島鳥や虫や空気でしょうから。

大水槽・潮目の海

福島川の川の上流から下流に下っていくと最後に潮目の海という巨大水槽にたどり着きます。二等辺三角形のトンネルが巨大水槽を二分した形で、デザインは、いまいちです。福島県沖の潮目の海を再現したもので、トンネルの片側から黒潮系の魚、片側から親潮系の魚を見られます。最近の水族館にはよくありますが、巨大水槽の前に座れる場所を設けており、ぼけーっと眺められるようになっています。

生活と科学・オセアニック・ガレリア

オセアニック・ガレリアという名前のコーナーでは、海流など海の科学に関する展示と地元の漁業に関する民俗展示があります。プランクトンの観察や伝馬船の櫓をこぐ体験が出来る体験展示のコーナーです。水族館の体験展示というと、ほとんどタッチプールなので、この展示からは新鮮な感じを受けました。ただし閑散としており、もっとこのコーナーを充実させてほしいと感じました。

実は魚屋は死体置き場? ふくしまの海

サヨリやサンマ等、魚屋ではおなじみの魚が展示されています。しかし、実はこれらの魚は水槽では飼育が難しく、他の水族館ではあまり見られないのだそうです。魚屋に並べられた魚は、生きている時の生態があまりわかっていないものが意外に多いのかもしれない。特にサンマについては、世界で初めて水槽内での繁殖に成功したのが、アクアマリンふくしまだそうです。これは、前身である小名浜の水産試験場の研究が基礎になっているのだと思います。

企画展・大金魚展

企画展は日本伝来500年ということで、金魚展をやっていました。「金魚」はアクアマリンふくしま独自の企画ではなく、日本全国で順番に開催されるものらしいのですが、ディスプレイは独自のものだと思います。床の間風に作ってあって凝っていました。アクアマリンふくしまでは、年に十回以上企画展があるそうです。一ヶ月に一回の頻度で通っても毎回違うものが見られるとは来館者にとって嬉しいですね。

その他の活動

サンマの繁殖に見られるように研究活動はかなり活発です。シーラカンスについての国際シンポジウムも主催しています。水生生物保全センターが併設されており、絶滅危惧種等を卵から育てる研究も行っています。生態

系展示の植物もここで育苗しているようです。また、教育普及活動に関しては自然観察会が平均して一ヶ月に2回行われています。

全体を通して

莫大なお金をかけないと、ここまでは出来ないと思いますが、アクアマリンふくしまは科学的な性格をもった画期的な水族館だと感じました。しかし、気になることもあります。それは、館内の一部を除いて、ほとんど字による説明がなかったことです。最近の水族館全体の傾向なのですが、最近の来館者は字による解説を読まないとのことで、極力、字による解説を省いているらしいのです。アクアマリンふくしまでは、コーナーごとにパンフレットがあって解説が欲しい人はそれをとる、また解説ツアーを充実させているということなのですが、私などは全く字による説明がないとフラストレーションを感じます。

また、来館者の中には、ペンギン・イルカがいないとか、サンマなどの地味な魚しかなくてつまらないという意見があるそうです。

字による解説を読まないことと関連することなのですが、水族館に来る人の大半は癒しを求めてやって来るのであって、知的好奇心を満たしに来るわけではなさそうです。このあたりに科学館とは別の、水族館固有の問題があると思います。

プロジェクト報告◆科学技術評価プロジェクト⑥
評価委員へのインタビューに向けて
プロジェクトメンバー 尾内隆之

10月勉強会の報告

これまで読んできた旧通産省作成の「量子化機能素子」研究開発プロジェクト評価書について、よりつつこんだ検証を行うために、評価委員へのインタビューを計画していますが、ようやく具体的に行動開始しました。10月の勉強会では、インタビュー依頼の手紙について討議し、依頼候補者を確認しました。まずは量子化機能素子研究に対して相対的にニュートラルな立場に近いと思われるジャーナリストや研究者を、優先的なアプローチ対象として絞り込みます。次回の勉強会までには、どなたかから承諾の返事が届いていると良いのですが……。11月以降のインタビュー本格実施を目指しています。

さらに、インタビューを実施する上での参考文献・資料をさがし、情報を共有しました。インタビューに備えて、日本の半導体開発の歴史について勉強しておこうということになり、以下のような文献を用いることに決め

ました。

- ・ 西村吉雄『半導体産業のゆくえ——メディア・ルネッサンスの時代へ』（丸善ライブラリー1995）
- ・ 山田敦『ネオ・テクノ・ナショナリズム』（有斐閣2001）から、日米の半導体産業政策を分析した部分。
- ・ 『日経エレクトロニクス』等の各種技術系雑誌・新聞などから、半導体開発史など量子化機能素子の背景分析に役立つような記事をさがす。

「日本工業新聞」の大型連載企画について

9月から日本工業新聞で始まった大型連載を紹介します。タイトルは、「なんとしても科学技術創造立国へ 検証17兆円の行方 第1期科学技術基本計画」という何とも（我々にとっては）タイムリーな記事です。11月いっぱいまで連載の予定で、この記事フォローして私たちが議論の一助にするつもりです。公共図書館などにあまり置かれていない新聞なので難しいかもしれませんが、関心のある方はぜひ目を通してください。これまで「Spring8」「超鉄鋼」「半導体」の他、今話題の「カミオカンデ」といったプロジェクトが登場しました。論調は、「検証」というわりには「日本の技術万歳！」的な雰囲気ですが、批判的視点も含まれています。批判意識をもった上で読めば得られる情報は決して少なくないと思います。「日刊工業新聞」と間違えやすいのでご注意ください。

次回の勉強会

11月2日（土）午後2時～5時に東京大学先端研13号館院生室で勉強会を予定しています。国の研究開発プロジェクトの行方、市民と科学技術政策の関わりなどに関心のある方なら、途中からの初参加であっても議論の輪に十分加われるものと思います。参加希望者はリーダーである藤田康元さん（RXM05777@nifty.ne.jp）までご連絡ください。

【最近思ったこと】 田中耕一さんへのノーベル賞授与には、日本の科学技術界に対する選考委員会の痛烈な批判が込められている、と考えるのは深読みのしすぎでしょうか（もちろん田中さんの受賞自体をおとしめようつもりは毛頭ありません）。

資料紹介（どうもML「おもしろボックス」より）

◆求む原稿！（どうも券贈呈）

金子淳『博物館の政治学』（青弓社2001）

博物館学という学問分野においては、1990年代にはいって次々と新しい図書が刊行されてきた。